

劉基『郁離子』訳註(二)

李 蕾

本稿は、元末明初の儒者の劉基が作成した寓言書の『郁離子』の訳註の一部である。現存するもつとも早い版本の成化六年本『誠意伯劉先生文集』にある「郁離子」（『文集』巻二から巻四）を底本とし、同じ版本系統の正徳十四年本（「正徳本」と略称）・嘉靖七年本（「嘉靖甲本」と略称）、および別版本系統の嘉靖三十五年本（「嘉靖乙本」と略称）・隆慶六年本（「隆慶本」と略称）を参照し、校勘を行う。他の資料を参照し、難解な字句に対して注を施す。現代語訳は白帝社より二〇〇七年に出版された鈴木敏雄氏の『郁離子全訳』も参考にした。なお、劉基及びその著作については、拙稿「元代における劉基の境遇と華夷思想」（『三國志研究』二十号、二〇二五年）を参照。

八駿（八頭の駿馬）

1.11

原文

穆天子得八駿以造王母、歸而伐徐偃王、滅之、乃立天閑・內・外之厩。八駿居天閑、食粟日石。其次乘居內厩、食粟日八斗。又次居外厩、食粟日六斗。其不企是選者爲散馬、散馬日食粟五斗。又下者爲民馬、弗齒於官牧。以造父爲司馬、故天下之馬無遺良、而上下其食者莫不甘心焉。穆王崩、造父卒、八駿死。馬之良駑莫能差、然後以產區焉。故冀之北土純色者爲上乘、居天閑、以駕王之乘輿。其羸爲中乘、居內厩、以備乘輿之闕、戎事用之。冀及濟河以北、居外厩、諸侯及王之公卿・大夫及使于四方者用之。江淮以南爲散馬、以遞傳服百役、大事弗任也。其士食亦視馬高下、如造父之舊。及夷王之季「二」年盜起、內厩之馬當服戎事、則皆飽而驕、聞鈺鼓而辟易、望旆而走、乃參以外厩。二厩之士不相能。內厩曰…「我乘輿之驂服也。」外厩曰…「爾食多而用寡、其奚以先我？」爭而聞于王。王及大臣皆右內厩。既而與盜遇、外厩先、盜北、內厩又先、上以爲功。於是外厩之士馬俱懈。盜乘而攻之、內厩先奔、外厩視而弗救、亦奔、馬之高足驥首者盡沒。王大懼、乃命出天閑之馬。天閑之馬實素習吉行、乃言于王而召散馬。散馬之士曰…「戎事尚力、食充則力強。今食之倍者且不克荷、吾儕力少而恆勞、懼弗肩也。」王內省而慚、慰而遣之、且命與天閑同其食、而廩粟不繼、虛名而已。於是四馬之足交于野、望粟而取。農不得植、其老羸皆殍、而其壯皆逸入于盜、馬如之。王無馬、不能師、天下蕭然。

校勘

「二」「季」、底本は「季」に作るが、誤。各校本に従つて訂正する。

訓読

穆天子、八駿（一）を得て以て王母に造り、歸りて徐偃王を伐ち、之を滅ぼし（二）、乃ち天閑・内・外の厩を立つ。八駿は天閑に居り、粟を食らふこと日に石。其の次の乗は内厩に居り、粟を食らふこと日に八斗。又た其の次は外厩に居り、粟を食らふこと日に六斗。其れ是の選ばんに企たざる者は散馬と為し、散馬は日に粟を食らふこと五斗。又た下なる者は民馬と為し、官牧に齒ませず。造父（三）を以て司馬と為し、故に天下の馬、遺す良無く、而して上下に其の食はせしむ者は甘心せざる莫し。

穆王崩じ、造父卒し、八駿死す。馬の良驚、差ふる能ふもの莫し。然る後に産を以て区す。故に冀の北土、純色なる者は上乘と為し、天閑に居り、以て王の乗輿を駕す。其の厩なるを中乗と為し、内厩に居り、以て乗輿の鬪を備え、戎事に之を用ふ。冀及び濟河北は外厩に居り、諸侯及び王の公卿・大夫及び四方に使ひする者、之を用ふ。江淮以南は散馬と為し、遞伝を以て百役に服し、大事には任ぜず。其の士の食も亦た馬の高下を視ること、造父の旧の如し。

夷王（四）の季年に及びて盜起こる。内厩の馬、戎事に服すべきに当たりて、則ち皆飽いて驕り、鉦鼓を聞きて辟易し、旆を望みて走れば、乃ち参ふるに外厩を以てす。二厩の士相能くせず。内厩曰く、「我は乗輿の驂服なり。」と。外厩曰く、「爾食多くして用寡し。其れ奚ぞ以て我に先だたん。」と。争

ひて王に聞こゆ。王及び大臣 皆内厩を右とす。既にして盗に遇い、外厩 先んじ、盗 北く。内厩又た先んじて上り功と為す。是に於ひて外厩の士・馬 俱に懈る。盗 乗じて之を攻め、内厩 先ず奔り、外厩 視て救はず、亦た奔り、馬の高足・驥首なる者すら尽く没す。

王 大いに懼れ、乃ち天閑の馬を出さんことを命ず。天閑の馬、実に素より吉行のみ習ひ、乃ち王に言いて散馬を召す。散馬の士曰く、「戎事は力を尚ぶ。食充つれば則ち力強し。今食の倍なる者すら且つ荷ふこと克はず。吾儕 力少なくて恒に勞す。肩へざることを懼る。」と。

王 内省して慙ぢ、慰めて之を遣り、且つ命じて天閑と其の食を同じくせしむ。而して廩粟 繼がず、虚名のみ。是に於ひて四つの馬の足 野に交はり、粟を望みて取る。農 植うを得ず、其の老羸は皆 殍え、其の壮は皆 逸して盗に入り、馬も之の如し。王 馬無くして師する能わず、天下蕭然たり。

注

(1) 八駿…『穆天子伝』によると、八駿は毛色で赤驥・盜驪などと名付けられ、東晋王嘉の『拾遺記』では絶地・翻羽などと、馬の能力や特徴で名付けられる。

(2) 『穆天子伝』による記事である。

(3) 造父…周穆王の御者で、「趙」氏の祖先とされる人物。『史記』趙世家を参照。

(4) 夷王…周穆王の曾孫。諸侯が周王朝を離反する時代にあたる君主で、虢国を派遣し戎狄を討った功

續もその時代背景が反映される。『史記』卷四 周本紀には「自是荒服者不至」とあり、范曄『後漢書』卷八十七 西羌伝第七十七には「夷王衰弱、荒服不朝」と記述している。

現代語訳

(周の) 穆天子は、八つの駿馬を手に入れて西王母を訪ねた。帰った後に、徐偃王を伐つて徐国を滅ぼし、天閑の厩・内厩・外厩を作った。八頭の駿馬は天閑の厩で飼育し、食料は一日あたり穀物一石であった。それに次ぐ馬は内厩に置き、食料は一日あたり八斗であった。またそれに次ぐ馬は内厩に置き、食料は一日あたり六斗であった。(三つの厩に入られるほどに) 及ばない馬は散馬といい、散馬は一日あたり五斗の穀物に与えられた。散馬以下の馬は民馬とし、つまり天子所有の牧草地に入れさせない馬であった。その時、造父は司馬の官に任命されたため、天下の良馬は全部朝廷に網羅され、それぞれの差等の馬を飼う人にも不満を抱く者は一人もいなかった。

しかし穆王の死後、造父も亡くなり、八駿も死んだ。その後は馬の良し悪しの見分けができなくなり、産地によって区分するようになった。そこで、冀州の北方で生まれ、毛色が揃っている馬を上等とし、天閑に入れて、王の車を引かせた。毛並みが粗く混じったものは中等として内厩に入れ、王の車の補充や軍事に使った。冀州および済河以北の馬は外厩に入れ、諸侯・王の高官・四方への使者などが用いた。江淮以南の馬は散馬とし、郵便や雑役に当て、重要な役割には用いなかった。馬を扱う者の待遇も馬の上下によって決め

られ、造父の頃の制度を引き継いでいた。

(穆王の玄孫の) 夷王の末年、盜賊が蜂起した。本来軍役に就くべき内廐の馬は、日頃の待遇が良く食べ過ぎて驕り、戦の鐘の音を聞くと逃げ腰になり、敵の旗を見ただけで走り出してしまった。そこで外廐の馬と混ぜて使うことになった。しかし内廐と外廐の担当者たちは互いになまこ行かず、争いとなった。内廐の者は言った、「わが内廐の馬は王の車を引く名馬だぞ。」と。外廐の者は反論した、「お前たちは食う量が多いのに働きが少ない。どうして我々より先に立てるのか。」と。その争いは王の耳に届き、王も大臣も内廐を優遇した。やがて盜賊と戦うことになり、外廐の馬が先に突撃し、盜賊は敗北した。内廐はそれで先を越して功績を上奏し、手柄を奪い取った。これによって外廐の馬も人もやる気を失ってしまい、盜賊はその隙を突いて攻撃し、内廐はまた先に逃げ、外廐もそれを見て助けずに逃げた。足が速く、頭を高く上げて走る名馬さえほとんど失われてしまった。

王は大いに恐れ、天閑の名馬を出すようと命じた。しかし天閑の馬はふだん吉事の時しか使われず、(戦いに慣れていなかったため、) 王に進言して、散馬を召集させた。散馬の士は言った、「戦いは力が大事です。食事が十分なら力も強くなります。しかし、今は食料が倍の馬でさえ支えられなかった状況です。我々は(食も少なく、) いつも働かされていますので、おそらく役に立てません。」と。

王は反省して恥じ入り、彼らを慰めて帰し、天閑と同じ食事を与えるよう命じたが、実際に倉からの供給が続かず、名目だけの制度となった。そこで、四つの廐の馬はすべて野に放たれることになり、穀物を見れ

ば取って喰ったので、農民も耕作できなくなった。老人や弱者は飢え死にし、壮年の者は盜賊に加わり、馬も同様に盜賊に合流した。王は戦いに使える馬がないため、軍を動かすことができず、天下は荒れ果ててしまった。

蜀賈（蜀国の薬商人）

1.12

原文

蜀賈三人、皆賣藥于市。其一人專取良、計入以爲出、不虛價、亦不過取贏。一人良・不良皆取焉、其價之賤貴、惟買者之欲、而隨以其良・不良應之。一人不取良、惟其多賣、則賤其價、請益則益之不較、於是爭趨之、其門之限月一易、歲餘而大富。其兼取者趨稍緩、再暮亦富。其專取良者、肆日中如宵、且食而昏不足。郁離子見而嘆曰…「今之爲士者亦若是夫。昔楚鄙三縣之尹三、其一廉而不獲于上官、其去也無以就舟、人皆笑以爲癡。其一擇可而取之、人不尤其取而稱其能賢。其一無所不取以交于上官、子吏卒而賓富民、則不待三年、舉而任諸綱紀之司、雖百姓亦稱其善。不亦怪哉。」

訓読

蜀の賈^{あんど}三人、皆 薬を市に売る。其の一人は専ら良を取り、入を計りて以て出と爲し、価を虚にせず、

亦た過ぎて贏を取らず。一人は良・不良皆焉いかにを取り、其の価の賤貴、惟だ買う者の欲により、随ひて其の良・不良を以て之に応ず。一人は良を取らず、惟だ其の多く売り、則ち其の価を賤しめ、益を請へば則ち之を益して較べず。是に於ひて争ひ之れに趨り、其の門の限も月に一たび易わり、歳余にして大いに富む。其の兼ね取る者、趨ること稍や緩く、再び碁にして亦た富む。其の専ら良を取る者は、肆 日中宵よるの如く、且に食すれど昏に足らず。

郁離子 之を見て嘆じて曰く、「今の士たる者亦た是の若し。昔、楚鄙三県の尹三、其の一は廉ちひにして上官に獲られず、其の去るや舟を就すに以ふる無し。人皆笑いて以て癡かなりと為す。其の一は可を擇びて之を取り、人 其の取るを尤とがめずして其の能賢を称す。其の一は取らざる所無くして以て上官に交はり、吏卒を子にし、富民を賓にす。則ち三年を待たずして挙げられて綱紀の司に任ぜられ、百姓と雖も亦た其の善を称す。(一) 亦た怪しからずや。」と。

注

(一) 鈴木敏雄氏の『郁離子全訳』は、「吏卒を子にし、富民を賓にす」県尹を肯定的に捉え、「官僚や役人は子供のよう大切にし、金持ちも上客のように大切にした」と翻訳するが、誤っている。蜀の賈の話が提示するように、劉基はここで、ずるくて小賢しい人が逆にいい結果を得ることの皮肉としている。だから「亦た怪しからずや」と嘆くのである。

現代語訳

蜀の商人が三人いて、いずれも市場で薬を売っていた。そのうち、一人は良い薬だけを選んで仕入れ、仕入れ値に見合うように売り値をつけ、値段もごまかさず、利益もわずかしか上乘せしなかった。もう一人は、良い薬でも悪い薬でも区別なく仕入れ、値段の高い安いはすべて買い手の望みに任せ、それに応じて良し悪しを出し分けた。さらにもう一人は、良い薬は仕入れず、とにかく量を多く売ることだけを第一とし、値段を安くし、増やしてくれと言われれば増やし、値段を比べたりはまったくしなかった。そこで客は競ってその店に集まり、店の敷居は月ごとにすり減って取り替えるほどになり、一年余りで大金持ちになった。良い薬も悪い薬も扱う者は、客の集まりはやや鈍かつらだが、二年ほどでやはり金持ちになった。しかし良い薬だけを扱った者は、店が日中でも夜のように閑散としており、朝食を取ったら夕方には食べるものに困るほどの貧しさであった。

郁離子はそれを見て、嘆いて言った、「今の士というものも、まさにこれと同じだ。昔、楚の田舎に三つの県があり、三人の県尹がいた。その一人は廉潔であったが、上官に取り立てられず、辞めるとき、舟に乗るための費用すらなく、人々には愚かだと笑われた。もう一人は、取り立てる際に妥当なものだけを選び、人々はその取立てをとがめず、彼の才能と徳をほめた。もう一人は、良し悪しを問わず、何も無差別に受け取り、それをもとに上官に取り入った。彼は部下の役人を子分のようにほしいままに扱い、富民のみを賓客

とみなして尊重したので、三年もたたずに抜擢されて監察の要職に就いた。一般の民衆ですら、彼のことを良いと称えた。——なんとも不思議なことではないか。」と。

賄賂失人心（賄賂は人心を失ふ）

1.13

原文

北郭氏之老卒・僮僕爭政、室壞不修且壓、乃召工謀之。請粟、曰…「未間、女姑自食。」役人告飢、蒞事者弗白而求賄、弗與、卒不白。於是衆工皆億恚、執斧鑿而坐。會天大雨霖、步廊之柱折。兩廡既圯、次及于其堂。乃用其人之言、出粟、具饗餼以集工、曰…「惟所欲而與、弗靳。」工人至、視其室不可支、則皆辭。其一曰…「向也吾飢、請粟而弗得、令吾飽矣。」其二曰…「子之饗餼矣、弗可食矣。」其三曰…「子之室腐矣、吾無所用其力矣。」則相率而逝。室遂不葺以圯。郁離子曰…「北郭氏之先以信義得人力、致富甲天下。至其後世、一室不保、何其忽也。家政不修、權歸下隸、賄賂公行、以失人心、非不幸矣。」

訓読

北郭氏の老卒・僮僕 政を争ひ、室壞れて修めずして且に圧たんとし、乃ち工を召して之を謀る。粟を請ひ、曰く、「未だ間あらず、女姑く自ら食らへ。」と。役人は飢うるを告ぐ。蒞事者 白さずして賄を求

め、与えざれば卒に白さず。

是に於ひて衆工皆僂悲し、斧鑿を執りて坐す。天 大雨霖に会ひて、歩廊の柱 折れる。兩廡 既に圯れ、次いで其の堂に及ぶ。乃ち其の人の言を用ひ、粟を出し饗餼を具へて以て工を集めて曰く、「惟だ欲する所にして与へん。斬をしまず。」と。工人至りて、其の室支さきふべからざるを視れば、則ち皆辞す。其の一曰く、「向に吾飢ゑて粟を請ふも得ず。今吾飽く。」と。其の二曰く、「子の饗餼けいえ、食らふ可からず。」と。其の三曰く、「子の室腐れり。吾れ其の力を用ふる所無し。」と。則ち相率ゐて逝く。室遂に葺かれずして以て圯る。

郁離子曰く、「北郭氏の先は信義を以て人力を得、富 天下に甲るに致る。其の後世に至りて一室すら保たず、何ぞ其れ忽ゆるがせなるや。家政 修まらず、権は下隸に帰し、賄賂を公に行ひて以て人心を失ふ。不幸に非ざるなり。」と。

現代語訳

北郭氏の家では、老人の家僕と若手の家僕が家政を奪い合っていたので、家屋は壊れかけていっても修理をせず、今にも倒れそうであった。そこで主人は工匠たちを呼んで修理について相談した。工匠たちが「まづ食べ物ください」と求めたところ、主人は「まだ用意する時間がないので、お前たちはしばらく自分で食べていてくれ」と言った。そこで（工匠を束ねる）役人が「皆は飢えています」と主人に訴えようとした

が、現場の管理人はその報告を取り次かず、かえって賄賂を要求した。工匠が賄賂を渡さないと、管理人も主人に報告しなかつた。

こうして工匠たちは皆疲れ、怒りを抱えながら、斧や鑿を手を持ったまま座り込んでしまった。そのうち、大雨が長く降り続き、歩廊の柱が折れた。両側の建物も倒れ、ついには母屋にまで被害が及びそうになった。そこで主人はようやく役人の言葉を聞き入れ、粟を出し、食事の用意を整えて工匠を集め、「匠人たちの望みどおり準備してくれ。けちけちするな」と管理人に言った。しかし、工匠たちは来て家を見てみると、もう建物が支えきれなくなったので、みな断ってしまった。ある者は言った、「前に私が飢えている時、粟を求めても与えてくれなかつた。今はもう満腹だ。」と。もう一人は言った、「あなたの出した料理は腐りかけていて、食べられない。」と。さらに別の者は言った、「あなたの家はもう腐ってしまった、手を施しようがない。」と。そこで工匠たちは連れ立って帰ってしまい、家は結局修理されずに倒れてしまった。

郁離子はこれを見て、「北郭氏の祖先は、誠実と義をもつて人々の協力をもらい、天下第一の富を得た。それなのに、その子孫はたった一軒の家すら守れなくなるとは、なんとおろそかになったことか。家政が整わず、権限は下役の者に握られ、賄賂の横行を公認しているため、人心を失った。運が悪いからではなく、自ら招いた結果だ。」と。

請舶得葦筏（舶を請うて葦の筏を得）

1. 14

原文

闕逢敦牂之歲、戎事大舉。有薦瓠里子宓於外闔（2）者曰…「瓠里先生實知兵、可將也。」聘至、瓠里子過郁離子辭、且請言焉。郁離子仰天歎曰…「嗟乎悲哉！是舉也忠矣、而獨不爲先生計哉？」瓠里子曰…「何謂也？」郁離子曰…「昔者秦始皇帝東巡、使徐市入海求三神蓬萊之山。請舶、弗予、予之葦筏。辭曰…『弗任。』秦皇帝使謁者讓之曰…『人言先生之有道也、寡人聽之。而必求舶也、則不惟人皆可往也、寡人亦能往矣、而焉事先生爲哉？』徐市無以應、退而私具舟、載其童男女三千人、宅海島而國焉。秦皇帝留連海濱、待徐市不至、不得三神山而歸、殂於沙邱。今之用事者皆肉食（3）、吾恐先生之請舶而得葦筏也。」既而果不用瓠里子。

訓読

闕逢敦牂（1）の歲、戎事大いに挙る。瓠里子の宓を外闔（2）に於いて薦むる者有りて曰く、「瓠里先生は実に兵を知る。將たる可し。」と。聘して至るや、瓠里子 郁離子を過りて辞し、且つ言を請う。郁離子天を仰ぎて嘆じて曰く、「嗟乎、悲しいかな！是の挙は忠なり。而るに独り先生の為に計らざるか。」と。瓠里子曰く、「何の謂ぞや？」と。郁離子曰く、「昔者、秦始皇帝東巡せしとき、徐市をして海に入り、三

神蓬萊の山を求めしむ。舶を請ふも、予へず、葦筏を予ふ。辞して曰く、『任へず。』と。秦皇帝 謁者をして之を讓しめて曰く、『人、先生に道有りといひ、寡人 之を聴けり。而るに必ず舶を求むれば、則ち惟だ人 皆 往く可からん、寡人も亦た往く能はん。而らば焉んぞ先生を事と為さんや。』と。徐市応ずる無く、退いて私に舟を具え、其の童男・女三千人を載せて、海島に宅みて国とす。秦皇帝 海浜に留連し、徐市を待てども至らず、三神山を得ずして帰り、沙邱に殂す。(3) 今の用事者皆肉食(4)なり。吾恐るらくは先生の舶を請ひ、葦筏を得んことを。」と。既にして果たして瓠里子を用いず。

注

(1) 闕逢敦牂は、甲午。甲午の年は、劉基の生涯では元順帝の至正十四年(一三五四年)にあたる。この年において、劉基は強盜(反乱した民)を避けようとしたために、朝廷から去つて、紹興へ移住した。「戎事大いに萃る」とは、民が離反したことを示すのであろう。

(2) 外閩…本来は城郭以外を指す言葉であるが、保衛と繋がっている。『史記』卷一百二 馮唐列伝には「閩以内者寡人制之、閩以内者先生制之」とある。

(3) 鈴木敏雄氏の『郁離子全訳』は、「三神山を得ずして帰り、沙邱に殂す」を徐市の経歴とするが、誤。『史記』卷六 秦始皇本紀に、「三十七年……七月丙寅、始皇崩于沙丘平台」とある。

(4) 肉食：『左伝』莊公十年の「肉食者鄙」が典拠であり、目先がきかない官僚を指す。

現代語訳

甲午の年、戦争が大規模に起こった。そのとき、ある者が瓠里子の宓という人物を地方防衛の官員に推薦して、「瓠里先生は本当に兵法に通じており、將軍にふさわしい人物です。」と言った。そこで政府は瓠里子を正式に招いたが、彼はまず郁離子を訪れて挨拶をし、さらに意見を求めた。郁離子は天を仰いで嘆いて言った、「なんと悲しいことです。先生の行動は忠義そのものですが、どうしてご自身のことを考えないのですか。」と。瓠里子が「どういう意味ですか。」と尋ねると、郁離子は語った、「昔、秦の始皇帝が東方を巡幸したとき、徐市に、海に出て三神山のうちの蓬萊を探させました。徐市が『大きな船をください』と頼みましたが、皇帝は船を与えず、葦で作った筏を渡しました。徐市が辞退し、『これは任に堪えません』と言うと、始皇帝は使者に命じて次のように責めた、『世間の人は皆、先生が道のある方だと言い、私もそれを信じている。ところが、どうしても船が必要だと言うなら、人は誰でも海に行けるし、私でも自ら行ける。それなら、どうして先生に頼む必要があるのか。』と。徐市はこれに対応できず、退いて自分で船を作り、童男・童女三千人を乗せて海島まで渡り、そこで国を築きました。始皇帝は海辺で徐市が戻るのを待ち続けたが、ついに帰らず、三神山も見つかからないまま帰還し、沙丘で亡くなりました。今の権力を握る者は、皆、地位が高いのに目先がきかない連中ばかりです。先生が大きな船を頼んでも、葦の筏しか与えられない

ことを心配しております。」と。

結局、やはり瓠里子は起用されなかった。

喻治（治を喻ふ）

1. 15

原文

郁離子曰：「治天下者其猶醫乎。醫切脈以知證、審證以爲方。證有陰陽・虛實、脈有浮沉・細大、而方有汗下・補瀉・針灼・湯齊之法、參・苓・薑・桂・麻黃・芒硝之藥、隨其人之病而施焉。當則生、不當則死矣。是故知證知脈而不善爲方、非醫也。雖有扁鵲之識、徒嘵嘵而無用。不知證不知脈、道聽塗說以爲方、而語人曰：『我能醫』、是賊天下者也。故治亂證「二」也、紀綱脈也、道德・政刑方與法也、人才藥也。夏之政尚忠、殷承其敝而救之以質。殷之政尚質、周承其敝而救之以文。秦用酷刑・苛法以箝天下、天下苦之。而漢承之以寬大、守之以寧壹。其方與證對、其用藥也無舛、天下之病有不瘳者、鮮矣。」

校勘

「二」證：諸本は「政」に作る。文脈によつて改める。

訓読

郁離子曰く、「天下を治むる者は、其れ猶ほ医するがごときか。医 脈を切して以て証を知り、証を審らかにして以て方を為す。証に陰陽・虚実有り、脈に浮沈・細大有り、而して方に汗下・補瀉・針灼・湯齊の法、参・苓・姜・桂・麻黄・芒硝の薬有り、其の人の病に随ひて施す。当たれば則ち生き、当たらずれば則ち死す。是の故に証を知り脈を知りて善く方を為さざるは医に非ず。扁鵲の識有りと雖も、徒らに嘵嘵たれば用無し。証を知らず脈を知らず、道聽塗説して以て方と為し、人に語りて曰く、『我能く医す』と、是れ天下を賊そとなふ者なり。故に治乱は証なり、紀綱は脈なり、道德・政刑は方と法なり、人才は薬なり。夏の政は忠を尚び、殷は其の敵を承けて之を救ふに質を以てす。殷の政は質を尚び、周は其の敵を承けて之を救ふに文を以てす。秦は酷刑・苛法を用いて以て天下を箝し、天下之に苦しむ。而して漢は之を承けて寛大を以てし、之を守るに寧壹を以てす。其の方と証対し、其の薬を用ふること舛たがふ無ければ、天下の病 瘳ゆること無き者鮮すくなし。」と。

現代語訳

郁離子は言った、「天下を治めるといふのは、医療と同じようなものだ。医者はずまず脈をとって病状を知り、病状をよく見極めてから治療法を決める。病状には陰・陽、虚・実の違いがあり、脈にも浮・沈、細・大の区別がある。それに応じて、治療法には、発汗、補ふ法、瀉す法、鍼灸、湯薬などさまざまな方法があ

り、薬も、参・苓・生姜・桂・麻黄・芒硝などいろいろと使い分け、人の病状に即してこれらを施す。診断と治療が適切なら病人は生きるが、誤れば死んでしまう。だから、病状を理解し、脈を知りながら、良い治療ができない者は医者とは言えない。たとえ扁鵲のような名医と同じ見識があっても、ただ口ばかりで騒ぎ立てるなら役に立たない。また、病状も知らず脈も理解せず、道端の噂を聞きかじって治療とし、自分は『医术ができる』などと吹聴する者は、天下に害をもたらす者となる。(国家の統治についても同じことが言える。)世の乱れは病状であり、政治秩序は脈であり、道徳や刑罰は治療に当たり、人材は薬に当たる。夏王朝の政治は忠を尊び、殷は夏王朝の衰微にあたってその弊害を質で救おうとした。殷の政治は質を尊び、周は殷王朝の衰微にあたってその弊害を文(礼楽・制度)で正した。秦は酷刑と苛法で天下を押さえつけ、人民は大いに苦しんだ。それに対し、漢王朝は寛大な政治を行い、安定させて統一を維持した。このように、治療と病状との関係を正しく把握し、薬の使い方を誤らなければ、天下の病で治らないものなどはほとんどない。」と。

噪虎(虎に噪ぐ)

1.16

原文

郁離子以言忤于時、爲用事者所惡、欲殺之。大臣有薦其賢者。惡之者畏其用、颺言毀諸庭、庭立者多和之。或問和之者曰…「若識其人乎？」曰…「弗識、而皆聞之矣。」或以告郁離子。郁離子笑曰…「女儿之山、乾

鵲所巢、有虎出于樸簌、鵲集而噪之。鳩鴒聞之、亦集而噪。鸛鷓見而問之曰…『虎、行地者也、其如子何哉、而噪之也?』鵲曰…『是嘯而生風、吾畏其顛吾巢、故噪而去之。』問於鳩鴒、鳩鴒無以對。鸛鷓笑曰…『鵲之巢木末也、畏風故忌虎。爾穴居者也、何以噪爲?』」

訓読

郁離子、言を以て時に忤たがひ、用事者の惡む所と爲り、殺さんと欲す。大臣に其の賢を薦むる者有り。之を惡む者は其の用ひらるるを畏れ、言を颺あげて諸を庭に毀こり、庭に立つ者多く之に和す。或るひと之に和する者に問ひて曰く、「若は其の人を識るか。」と。曰く、「識らず。而れども皆之を聞けり。」或るひと以て郁離子に告ぐ。郁離子笑いて曰く、「女兒の山、乾鵲 巢くふ所、虎 樸簌より出づること有り、鵲 集まりて之に噪ぐ。鳩鴒 之を聞きて、亦た集まりて噪ぐ。鸛鷓見て之に問ひて曰く、『虎は地を行く者なり。其れ子を如何せんや、而るに之に噪ぐや。』」と。鵲曰く、『是れ嘯うそいて風を生ず。吾 其の吾が巢を顛するを畏る。故に噪ぎて之を去らしむ。』」と。鳩鴒に問ひて、鳩鴒 以て對こたふること無し。鸛鷓笑ひて曰く、『鵲の巢は木の末なり。風を畏るるが故に虎を忌む。爾は穴に居る者なり。何を以て噪ぐや。』」と。

現代語訳

郁離子は言論が当時の権力者に逆らい、権力者に憎まれ、ついには殺されそうになっていた。しかしある

大臣が、郁離子の賢さを王に推薦した。憎む者は、もし郁離子が登用されれば困ると心配し、朝廷で彼を中傷する言説を広め、廷臣たちにもそれに調子を合わせる者が多かった。そこで、ある人が調子を合わせる者に、「郁離子という人物を知っているのですか。」と問いたましたが、「知らない。しかし皆がそう言っているから。」と答えられた。その話が郁離子に伝えられると、郁離子は笑って言った、「女几山には、カササギが巢を作って住んでいるが、虎が草むらから現れると、カササギは集まって威嚇する。その声を聞いたハツカチヨウも、理由も知らないまま集まって同じように騒ぎ始めた。ヒヨドリがこの状況を見てに尋ねた、『虎は地面を歩くだけの動物だ。お前たちになんの害があるのか。なぜ威嚇したりするのか。』と。カササギは、『虎が吠えようと風が起こる。私はその風で自分の巢が吹き飛ばされるのが怖いから、威嚇しておっ払うのだ。』と答えた。ハツカチヨウに聞いてみると、ハツカチヨウは答えることができなかった。そこでヒヨドリが笑って言った、『カササギの巢は木の先端にあるから風を恐れ、虎を嫌う理由がある。だが君たちは地面の穴に住んでいるだろう。どうして威嚇したりするのさ。』と。」と。

搏沙（沙を搏む）

1.17

原文

郁離子曰…「民猶沙也、有天下者惟能搏而聚之耳。堯・舜之民、猶以漆搏沙、無時而解。故堯崩、百姓如喪考妣、三載、四海遏密八音、非威驅而令肅之也。三代之民、猶以膠搏沙、雖有時而融、不釋然離也。故以

子孫傳數百年、必有無道之君而後衰、又繼而得賢焉則復興。必有大無道如桀與紂、而又有賢聖諸侯如商湯・周武王者間之而後亡。其無道未如桀・紂者不亡、無道如桀・紂而無賢聖諸侯適丁其時而間之者亦不亡。霸世之民、猶以水搏沙、其合也若不可開、猶水之冰然、一旦消釋、則渙然離矣。其下者以力聚之、猶以手搏沙、拳則合、放則散。不求其聚之道、而以責于民曰…『是頑而好叛。』嗚呼、何其不思之甚也。」

訓読

郁離子曰く、「民猶ほ沙のごとし。天下を有つ者、惟だ能く之を搏つまめて聚むるのみ。堯・舜の民は、猶ほ漆を以て沙を搏むるのごとく、時として解くること無し。故に堯崩ずれば百姓考妣を喪ふが如くし、三載に、四海八音を遏密す。威もて驅りて令をもつて之を肅せしむるに非ざるなり。三代の民は猶ほ膠を以て沙を搏むるのごとく、時として融くること有りと雖も、积然として離れず。故に子孫に以て數百年を伝へ、必ず無道の君有りて後に衰ふるも、又た繼いで然るに賢を得れば則ち復た興る。必ず大いに無道なる、桀と紂の如き有り、又た賢聖の諸侯、商湯・周武王の如き者有りて之を間にすれば後に亡ぶ。其の無道の未だ桀・紂の如くならざる者は亡びず、桀・紂の如く無道なるも賢聖の諸侯適に其の時に丁あたり、之を問するもの無くんば、亦た亡びず。霸世の民は、猶ほ水を以て沙を搏むるのごとし。其の合ふや開く可からざるが若く、猶ほ水の氷のごとく然り。一旦消積すれば則ち渙然として離る。其の下の者、力を以て之を聚むれば、猶ほ手を以て沙を搏むるのごとし。拳すれば則ち合ひ、放てば則ち散る。其の之を聚むるの道を求めずして、以

て民を責めて曰く、『是れ頑にして叛くを好む。』と。嗚呼、何ぞ其れ思はざること甚だしきや。」と。

現代語訳

郁離子は言った、「民は砂のようなものだ。天下を治めるといふのは、この砂をうまく固めてまとめるだけのことだ。堯・舜の時代の民は、まるで漆で砂を固めるようであり、決して崩れることはなかった。だから堯帝が亡くなった時、百姓はまるで父母を失ったように悲しみ、三年間、天下では音楽が完全に止んだ。これは、威圧して命令したからではなく、民が心から敬愛していたからだ。三代の民は、膠で砂を固めるようにまとまっており、一時的にゆるむことがあっても、完全にばらばらになることはなかった。そのため、王朝は子孫へ数百年も受け継がれ、無道の君主が出る限り衰えるものの、賢君が現れば再び興盛した。必ず桀や紂のような極めて暴虐な王が出て、さらに商の湯王や周の武王のような聖賢の諸侯がいて、これを討つ場合にはじめて滅亡した。暴君が現れても、桀・紂ほどの無道さでなければ国は滅びず、桀・紂ほど暴虐な君主がいても、それを討つ賢聖な諸侯がちょうどその時いなければ、やはり滅びない。覇者の時代の民は、水で砂を固めるようなものだ。一見しつかり固まっていた、水が氷になったようだが、いったん溶けてしまえば、砂は一気に崩れ去る。さらに下等の君主は、力づくで民を集めて支配とするが、これは手で砂を握り固めるようなものだ。握れば丸まっているように見えるけれども、手を開けばすぐ散ってしまう。それにもかかわらず、民をまとめる道を求めず、かえって民を責め立てて、『民は頑迷で叛逆しやすい』という。あ

あ、なんと考えの浅いことだろう。」と。

虞卿諫賞盜（虞卿 盜みを賞するを諫む）

1.18

原文

平原君患盜、誅之不能禁。或曰…「更賞之、足則戢矣。」虞卿曰…「不可。先王立賞罰以勸懲善惡。衰世之政也、雖微、猶足以激其趨。故賞禁僭、罰禁濫、縣衡以稱之、猶懼其不平也、而況敢逆施之乎？夫民之輕禁以逞欲、如水之決、必有所自。求而塞之、斯可矣。今此之不索、而力遏其流、至于不能制、乃不省其闕、而欲矯以逆先王之法度、是猶欲止水而去其防「二」也。其庸有瘳乎？夫民、有欲而無厭者也。節以制之、猶或逾焉。盜而獲賞、利莫大矣。利之所在、民必趨焉。趨而禁之、是貳政也。趨而不禁、人盡盜矣、是鼓亂也。不臧孰甚焉？」平原君豁然而寤、起、再拜受教、盡散其私財以濟貧乏、申明舊章、而重購以賞獲盜者。於是趙盜皆走之燕。道不拾遺、虞卿之教也。

校勘

「二」防…底本は「坊」に作る。正徳本はこれを正し、以降の諸本も「防」に作る。

訓読

平原君、盗を患ひ、之を誅すれども禁ずる能はず。或る人曰く、「更へて之を賞せ、足れば則ち戢まらん。」と。虞卿曰く、「不可なり。先王、賞罰を立つるは善悪を勸懲するを以てなり。衰世の政なれば、微なりと雖も、猶ほ以て其の趨きを激するに足る。故に賞は僭を禁じ、罰は濫を禁じ、衡を縣けて以て之を称るといへども、猶ほ其の不平を懼るなり。況んや敢えて逆に之を施すをや。

夫れ民の禁を軽んじて以て欲を逞たくまくするは、水の決するが如く、必ず自る所有り。求めてこれを塞ぐ、斯れ可なり。今此れを索めずして、而れども其の流れを遏めんと力め、制する能わざるに至る。乃ち其の闕く所を省みずして、矯するに先王の法度に逆らふを以てせんと欲するは、是れ猶ほ水を止めんと欲して其の防を去るがごとし。其れ庸ぞ瘳ゆる有らんや。

夫れ民は、欲有りて厭くること無き者なり。節して以て之を制すれども、猶ほ或いは逾ゆ。盗して賞を獲らば、利これより大なるは無し。利の在る所、民必ず焉に趨く。趨らしめて之を禁ずれば、是れ政を貳つにするなり。趨いて禁ぜざれば、人尽く盗す。是れ乱を鼓するなり。臧たからざること孰れか甚だしきや。」と。

平原君豁然として寤り、起ちて再拜して教へを受け、尽く其の私財を散じて以て貧乏を濟ひ、旧章を申明し、購あがなひを重くして盗を獲る者を賞す。是に於いて趙の盜皆走りて燕に之く。道に拾遺せざるは。虞卿の教へなり。

現代語訳

趙国の平原君は、国内で盗賊が多いことに悩み、盗賊を処罰しても、盗みが止まらなかつた。ある者は「逆に盗賊に賞を与え、利益が十分であればかえって収まるでしょう。」と建言した。これを聞いた虞卿は言つた、「それはいけません。そもそも先王が賞と罰を定めたのは、善を励まして悪を戒めるためです。世が衰えますと、賞罰は些細でも、人々の行動を動かすには十分です。だから、褒賞は適切な基準を超えるのを抑え、罰は濫用を抑え、常に秤をかけてバランスを保とうとし、それでもなお不公平を恐れるほど慎重しなければなりません。まして、その仕組みに逆らうようなやり方をどうしてできましようか。」

「民が禁令を軽んじ、欲望を逞しくすることは、まさに水が決壊するようなものです。必ずその原因があります。原因を探し出して、きちんと塞げば宜しいです。しかし今は原因を調べもせず、ただ力で水流を押さえつけようとしても、制御することはできません。そのうえ自らの過ちを顧みず、先王の法度に逆らう方法で矯正しようとするなど、それはまさに、水を止めたいのに堤防を壊してしまうのと同様です。それでどうして治まる可能性がありますか。」

「また、民というものは欲があつて厭くなきものです。節度をもつて抑えようとしても、越えることがあるほんです。もし盗みをすれば賞が得られるとなれば、利益は莫大です。利益があるところには、民は必ず赴きます。赴いて群がらせておきながら、それを禁じれば、これは貳政になります。群がるのに禁じなければ、民は皆盗みをするようになり、これは乱れを鼓舞することになります。こんなに悪いことがほかにあり

ましようか。」と。

平原君ははつと悟り、立ち上がって丁寧に挨拶し、教えを受け入れた。そして私財を惜しみなく分け与えて貧しい者を救い、古来の賞罰を再び明確にし、盜賊を捕らえた者には高額の賞金を与える制度を設けた。すると、趙の国内にいた盜賊はみな燕へ逃げ去った。道には落とし物すら拾われないほど治安が回復した。これは虞卿の教えのおかげである。

論智（智を論ず）

1. 19

原文

州之庸問於郁離子曰…「雲山出也、而山以之靈。煙火出也、而火以之畜。不亦異哉？」郁離子曰…「善哉問。夫人之用智者亦猶是也。夫智人出也、善用之、猶山之出雲也。不善用之、猶火之出煙也。韓非囚秦、晁錯死漢、煙出火也。」

訓読

州の庸、郁離子に問ひて曰く、「雲は山より出で、山 之を以て靈と為す。煙は火より出で、火 之を以て畜む（一）。亦た異ならずや？」と。郁離子曰く、「善いかな問ひ。夫れ人の智を用ふる者も亦た之に猶ほ是のごとし。夫れ智は人より出で、善く之を用ふれば、猶ほ山の雲を出だすが如し。善く用ひざれば、猶

ほ火の煙を出だすが如し。韓非 秦に囚はれ、晁錯 漢に死するは、煙の火より出づるなり。」

注

(一) 『説文解字』卷十一 火部に「熄、畜火也。从火息聲。亦曰滅火」とあり、「畜」は火を止む(消す)という意味がある。鈴木敏雄氏の『郁離子全訳』はこの意味を捉えず、「火種を蓄える畜火」と翻訳し、後の文脈に通じない。

現代語訳

州の庸が郁離子に尋ねた、「雲は山から生じ、そのために山は靈妙なものと見なされます。また煙は火から生じ、しかし煙のせいで火が消えます。変ではありませんか。」と。郁離子は、「良い問いだなあ。そもそも人が智慧を用いることも、これと同じなのだ。智慧は人から生じるが、それをうまく用いれば、山が雲を生むように良い働きをもたらす。しかし、うまく用いなければ、火が煙を噴き出すように自らに害を生む。韓非が秦に幽閉され、晁錯が漢で誅されたのは、煙が火から出るように、自ら禍いを買ったのだ。」と。